

批評言説におけるチャップリンの喜劇役者から芸術家への変容 —映画『キッド』(1921)を巡って—

五十嵐 由香*

1. 序

チャールズ・チャップリン(Charles Chaplin, 1889-1977)が、映画に登場して世界中で人気急上昇した裏側で、米国の映画批評の言説においては、チャップリンのドタバタ喜劇の「低俗性(vulgarity)」を理由に上流階級から非難もあがっていた。製作した映画が万人から容認されるためにチャップリンがとった中道策は、一般大衆が喜ぶ「低俗性」と上流階級が求める「芸術性」をあわせ持つ作品を製作することだった。こうして1921年に喜劇にペーソスを交えた『キッド(*The Kid*)』が公開された。この頃を境に、批評言説において表象されるチャップリンは、大衆娯楽の「喜劇役者」から「芸術家」へと変化した。さらに1920年代から30年代にかけての演劇、文学の批評言説において、チャップリンは伝統的な道化の末裔として認識されるようになった。

本稿では、当時の映画雑誌、新聞記事に現れたチャップリンに対する評価が変化する過程と、背景を整理しておきたい。

2. 雑誌、新聞記事に現れるチャップリンに関する批評言説

『映画の歴史』の著者ベンジャミン・ハンプトンは、「1912年から1920年の間に、非常に多くの週刊、月刊の出版物がただ映画のためだけに捧げられ、爆発的に創刊された」と述べている。そして、そうした刊行物(いわゆる「ファンマガジン」)は「総計数百万冊が出回り、一、二種類は映画に関する様々な話題を知的に扱い、良く編集された刊行物へと発展していった」と指摘する(Hampton 207)。当時の映画批評の言説は、ハンプトンのいう「ファンマガジン」と新聞に掲載されたレビューやインタビュー記事の中に存在する。そうした批評言説は、セオドア・ハフ『チャーリー・チャップリン』(1951)、ドナルド・マカフリー編『フォーカス・オン・チャップリン』(1971)、スタンレイ・コフマン編『アメリカの映画批評』(1972)、デイビッド・ロビンソン『チャップリン——生涯と芸術——』(1985)、チャールズ・マランド『チャップリンとアメリカの文化』(1989)、ケビン・

* 人間科学総合研究所客員研究員

ヘイズ編『チャップリン インタビュー集』(2005)、リチャード・シッケル編『エッセンシャル チャップリン』(2006)において断片的に紹介されている。本章ではこれらの先行研究を参照しながらチャップリンが映画に初めて登場した1914年から1921年までの批評言説の中で重要と思われるものを年代順にまとめ、チャップリン評価の変容の軌跡をたどってみたい。

【1914年】

1914年は、放浪者チャーリーというキャラクター¹が生まれ、観客の意識の中に浸透していった年である。チャップリンはこの年の2月、キーストン社が製作した『成功争い』(*Making a Living*, dir. Henry Lehrman)で映画デビューをはたし、二作目となる『ヴェニスの子供自動車競走』(*Kid Auto Races at Venice*, dir. Henry Lehrman)では、初めて放浪者のコスチュームをまとめて登場する。4月に公開された『恋の20分』(*Twenty Minutes of Love*)以降は、チャップリンも監督を務めるようになる。

マランドによると、雑誌 *Moving Picture World* がデビュー作からその存在に注目はしていたが、チャップリンという名前は同雑誌の10月号までともに綴られることはなかった。さらに、チャップリンが演じるキャラクターは観客の人気を集めたが、まだチャーリーとか放浪者 (a tramp) とかチビ (the little fellow) などと称されるには至らなかった (Maland 7)。10月に行われた *Motion Picture Magazine* の「俳優コンテスト」では上位100人の中にチャップリンの名前はない (Great Artist 128)。チャップリンを紹介するものとしては、*Motion Picture Magazine* 8月号の「俳優控室メモ」に「チャールズ・チャップリン (キーストン社) は16年間『役者』をしている、しかしまだほんの24歳の若者だ」(Greenroom 126) という記述と素顔で筋肉質なチャップリンとブルドッグと思しき犬の戯画 (Penograph 131) が載り、そして12月号「映画俳優のギャラリー」の1ページに、素顔のチャップリンの絵が4つの百面相の絵で取り囲まれている構図で、掲載されている (Gallery 24)。ここには、他に15人の肖像画があるが、素顔と役柄というふたつの「顔」が描かれているのはチャップリンだけである。

【1915年】

1915年、チャップリンはエッサネイ社に移籍し、エドナ・パーヴァイアンス (Edna Purviance) をヒロイン役にむかえる。この年には、放浪者チャーリーは世界中で爆発的に人気上がり、物まねコンテストが各地で行われ、グッズの販売、雑誌のノベルティ、漫画など、ありとあらゆるところに「チャーリー」が現れた。アメリカ中の新聞社は、チャップリンに関する情報収集を始め、雑誌にはインタビュー記事が載るようになった。製作者としてのチャップリンが人々の興味の対象となり始めた。

¹ ダービー帽とちょび髭、窮屈な上着にダブダブのズボン、ドタ靴にステッキというコスチュームをまとったキャラクター。

一方で、上流階級の人々や宗教団体のリーダーからは、映画の低俗性 (vulgarity) を巡って教育への悪影響やモラルの低下を理由に、上映禁止を求める声もあがった。チャップリンを巡る人々のこのような反応は、アメリカにおける「文化的な分断」を生じさせた (Maland 12)。

Motion Picture Magazine 1月号の「俳優役柄コンテスト」において、男性喜劇俳優の部門でチャップリンが一位を獲得する (Great Cast 126)²。*Motion Picture Magazine* 3月号のインタビュー記事「映画で一番面白い男」は、チャップリンの第一印象を「非常にハンサムでつやのある黒髪、茶色い瞳で見つめる目には真面目さがあり、到底喜劇役者とは結びつかない。実際、何度も喜劇映画の中の彼にはお目にかかっているが、彼のことは何も知る由もない」と記している (Eubank 75)。

6月の *Motion Picture Magazine* には、「ひどく貧乏な移民」から「最高給取の映画俳優」へというチャップリンの「成功」が戯画化されている (Maland 12)。同10月号には、ある上流階級の家庭で一人の紳士と男の子が次のような会話をしている様子が戯画とともに掲載された。

ウィリー：チャーリー・チャップリンを見てきたよ。

叔父：チャーリー・チャップリン？いったい誰だ？

ウィリー：え？チャップリンを知らないの？なんて無知なんだ！ (Maland 16)

マランドは、この絵は当時の若い世代 (ウィリー少年の世代) にみられた「チャップリン狂 (Chaplinitis)」の現象と紳士の世代に属する人々のジェネレーションギャップを示していると説明している (Maland 12)。チャップリンの人気の急上昇していた裏で、アメリカの上流階級の間ではチャップリンが敬遠されていた。

【1916-17年】

1916年、チャップリンはミューチュアル社に移籍した。1916年から1917年は、チャップリン自身がのちに「自分のキャリアの中で一番幸せな頃」だったと回想する、本人にとって充実した時期であった (Chaplin 1964, 188)。この二年間に書かれた記事のキーワードは、“new (新しい)”と“real (真実の)”である。そして批評言説の焦点は、放浪者チャーリーから製作者チャップリンへと移った。

1916年1月、*Motion Picture Magazine* に「新しいチャーリー・チャップリン」という記事が掲載された (Hirsch 115-117)。その記事は、国立映画調査委員会 (The National Board of Censorship)³の委

² この記事では、主役 (男女)、老人役 (男女)、脇役 (男女)、喜劇役者 (男女) 若手俳優 (男女)、悪役、子役に分けて一般読者の投票を募っている。

³ The National Board of Censorship とは、1908年にニューヨーク市長が防火対策やモラルの低下を理由に映画の上映を禁止するという事態が生じ、政府の検閲を避けるのが目的で翌年、市民団体と映画製作会社らが共同で立ち上げた検閲機関である。新作映画に関する非公式の情報センターの役割をし、1916年3月には The National Board of Review という名称に変わる。したがってこの記事は名称が変わる直前のものである。

員長 W・W・バレット (W. W. Barrett) がチャップリンをインタビューした時の内容をまとめたもので、チャップリンが従来の製作方法から方向転換をすると語ったことが報告されている。バレットはチャップリンに対して、「あなたがこれまで成功を勝ち取った古いやり方(低俗なドタバタ喜劇)が、今度はあなたの名声を危うくしている。なぜなら、不快で低俗な道化芝居には馴染まない上流階級の人々というアメリカ国民の大部分を遠ざけてしまうからだ」と圧力をかけた。それに対して、チャップリンは、バレットの言葉を受け入れ、これからは、新しいやり方で映画製作をすると約束したと書かれている。素顔のチャップリンは映画で演じているキャラクターとは違い、「こざれいでおしゃれに着飾った若者だ。自分でシナリオを書き、演じ、製作し、監督する働き者である。際立って聡明で、控えめで、熱狂的な人気には少しも影響されず、非常に熱心で能率的でつましい人物だ。一攫千金の類のふつうの俳優ではない」とほめ称え、続くページにチャップリンの素顔の写真を載せて「紳士的」なイメージを強調している。さらにチャップリンのスローガンは「芸術至上主義」で、芸術的な視点から、映画の未来へ計り知れない可能性を夢見る野心家であることやチャップリンが喜劇のスタイルを変えようとしていることを真面目な調子で語ったとして、チャップリンの次の言葉を引用している。

ミュージックホール⁴での訓練と経験から、習慣の力で少し低俗な筋を演じる癖がついたのだ。低俗だからと言って誰も傷つけはしないのだが、しかし私の考えでは、また芸術家の視点から低俗性は映画を確かに騒がしく、非芸術的にしてしまう。私が仕事の中で使ってきたこのエリザベス朝のユーモアの表現形式、道化芝居やドタバタ喜劇の粗雑な形式は全て私の初期の映画製作の環境のせいである。そして、いま、私はこの類のユーモアからは離れて、もっと手の込んだより繊細な演出をしていこうと思う。(Hirsch 117)

ここで注目すべきことは、チャップリン映画の「低俗性」は、彼が英国のミュージックホールで培った経験に由来するものとチャップリン自身が認めていることである。さらに、アメリカの上流社会が「低俗」だと嫌悪するものの正体は、英国のミュージックホール文化の源流であるエリザベス朝(シェイクスピアなどの作品)のユーモア、道化芝居、ドタバタ喜劇に由来することをほのめかしているのである。つまりチャップリンが生まれ育った英国には伝統的に、この「低俗」な喜劇を受け入れる寛容さがあるが、当時の米国の上流社会では「低俗」な喜劇は容認されないということを暗に示している。そして、改善しようとしているのは「演出」であることを強調しているのである。

追い風が吹くように5月には、高級雑誌 *Harper's Weekly* に有名舞台女優ミニー・マダーン・フィスクが「チャールズ・チャップリンの芸術」と題する記事を寄せた。彼女はチャップリンの映画が、

⁴ ミュージックホール (music hall) は19世紀中期から20世紀初期まで英国で栄えた労働者のための娯楽施設。客は酒や食事とともに、歌、踊り、手品、寸劇 (sketch) などの演芸を安価で楽しんだ。チャップリンは、1907年から1913年までフレッド・カーノー一座に所属してミュージックホールの芸人として好評を博した。

下品で低俗だといわれていることに触れ、チャップリンを弁護してこう称賛した—「世界中を笑わせ、その名前が浸透し、親しまれているという事実からすれば、チャップリンは天才喜劇役者というだけでなく、世にもまれな芸術家である。芸術を定義する資格のある批評家たちはさておき、彼の演技を分析し、その秘密を解き明かしたいという思慮深い人々も出てきている。批評家は、彼の正確な技術に裏打ちされた尽きることのない想像力を認識しているではないか。チャップリンは低俗だが、そもそも道化に低俗はつきもので、アリストファネス、プラウトゥス、テレンティウス、シェイクスピアを含むエリザベス朝、ラブレー、フィールディング、スモレット、スウィフトも同様に、偉大な喜劇で低俗性を有している作品をあげればきりがなく、」と（Fiske 494, McCaffrey 69–70, Schickel 97–99）。フィスクは、前述のチャップリンの言葉を補強するように、具体的な作家を並べて低俗性と喜劇の密接な関係を説明し、初めてチャップリンを伝統的な西洋演劇に登場する道化と比較して論じた。この記事を書いた数か月後、さらにフィスクはチャップリンを侮蔑した演劇評論家に非難の手紙を送り、「チャップリンはすべての真の芸術家と同じように、光と影の、歓楽とペーソスの、ほほえみと涙の巨匠である」と主張した（Robinson 210）。

1917年2月、*New Republic*には劇作家ハーヴェイ・オヒギンズの「チャーリー・チャップリンの芸術」が掲載され、チャップリンを偉大なサーカスの道化スリヴァーズ（透徹した想像力のコメディアン）になぞらえ、『カルメン』でチャップリンが死ぬ場面は女優サラ・ベルナルのどの演技にも負けないくらい「悲劇的だ」と絶賛している（O'Higgins 16–18, Robinson 211–12）⁵。

【1918年】

1918年、チャップリンはファースト・ナショナル社に移籍し、『犬の生活』（*A Dog's Life*）を製作した。この映画はチャップリン自身がそれまでの映画製作の方法を変えたことと自認する作品である（Chaplin 1964, 208）。雑誌や新聞の記事においては、「真面目な（serious）」チャップリンの側面にスポットライトが当てられた。

チャップリンの友人であり、広報担当者となったロブ・ワグナーによる「チャールズ・スペンサー・チャップリン氏：あなたの知らない人物」が、*Ladies Home Journal* 8月号に掲載された。この記事で注目に値するのは、チャップリンのフルネームが表記されていることである。観客の知らない実際のチャップリンは、子供好きであり子供からも好かれ、映画製作のすべてを一人で行う映画作家、多才でクリエイティブな天才、審美眼の持ち主で音楽にも精通している。インテリで多読家で、働き者で名声には目もくれない。お金持ちだが実生活は地味である、とまるで聖人君子のごとく書かれている（Wagner 82）。この雑誌はアメリカ全土で人気があり、明らかにチャップリン自身のプロモーションの意図があるだろうとマランドは説明している（Maland 48）。

『担へ銃』（*Shoulder Arms*, 1918）が大ヒットした後、11月にチャップリンが、*American Magazine*

⁵ 『チャップリンのカルメン』（*Charlie Chaplin's Burlesque on Carmen*, 1916）の最後の場面でチャップリンは、剣先が引つ込む玩具の短剣を使って自死の場面を演じる。

に「人々は何を笑うのか」を発表する。この記事でチャップリンは、人を笑わせる秘訣は何であるかと多くの人々から質問されることへの回答、自身の経歴、映画製作の方法論について実際の映画を例に挙げて説明している。そして、「人を笑わせることにつながる秘訣はない。ただ映画製作に使えるような事実や出来事を、常に目を皿のようにして探して、脳を機敏に働かせておくことだ。私は人間性 (human nature) を学んできた、その知識がなければ映画を製作できない。この知識がすべての成功の礎となっている」と主張している (Chaplin 1918, 37)。

【1919-20年】

1919年から1920年の二年間はチャップリンの私生活での不調と、二本の映画『サニーサイド』(Sunnyside, 1919年6月公開)と『一日の行楽』(A Day's Pleasure, 同年12月公開)への酷評⁶、興行成績の不振に対する記事が目立つ。1920年は『キッド』の撮影、編集にほぼ全勢力が費やされたため、公開された映画はない。

1919年の高級雑誌 *Theater Magazine* 10月号には、「チャーリー・チャップリンの流行は廃れつつあるのか?」という辛口の記事が掲載された。チャップリンは偉大な芸術家かそれとも単に驚くほど成功した喜劇役者かという問いかけをし、チャップリンの映画は、他人の不幸を見て笑うという心理的な法則の上に成り立っていて、低俗な人間の本性に訴えてくるだけである。チャップリンはたまたま低俗な喜劇の中で生まれたキャラクターで大当たりをし、その役柄の繰り返しに過ぎない。だから偉大な芸術家ではないと結論付けられている (Farmer 249, McCaffrey 71-73)。この批評は、1916年1月のバレットの見解を想起させ、上流階級による攻撃的な批評に逆戻りした印象を与える。

1919年12月には、友人のダグラス・フェアバンクス (Douglas Fairbanks) を交えたインタビュー記事が *Los Angeles Herald* に掲載され、その中でチャップリンは製作中の『キッド』への抱負を次のように語っている。

今製作中の映画には、私が登場する前に一卷分丸々真面目なドラマが撮影されている。ペース、人間に関する興味、悲劇、ユーモアといった私たちがすでに手に入れてきたすべてのものをそこに集約した。さらに、この一卷は物語の核心と関連付けられ、物語を構成するものなのだ。それは喜劇ドラマ (comedy drama) だ。それが、今後私がやっつけようとしているものなのだ。(Frohman, Hayes 44)

この頃のチャップリンは喜劇と悲劇の融合を目指していたことが分かる。

⁶ マランドはこの二つの映画に対する典型的な評価として、ある雑誌が書いた「『サニーサイド』はただ陽気 (sunny) なだけ。『一日の行楽』は全く娯楽 (pleasure) にならない」という批評によって要約されると述べている (Maland 47)。

【1921年】

1921年2月、前作公開から1年2か月ぶりの作品『キッド』が公開される。チャップリンが製作する初の長編（上演時間53分）で、「笑いと涙」というチャップリンのキャッチフレーズの入ったタイトルで始まる「感傷を伴うドタバタ喜劇（Chaplin 1964, 233）」である⁷。『キッド』は、それまでのチャップリン映画で一番の興行成績をおさめた。するとこの映画を「芸術作品」として認める批評家が出現する。ハフは、『キッド』を「だいたい真面目なドラマ」で「笑いは、ドタバタやばか騒ぎからではなく、置かれた状況やパントマイムから生じる」と評し、「興行成績と同じぐらい素晴らしい批評であふれかえった」と記している（Huff 126）。

コフマンは、『キッド』について書かれた批評として次の二つの記事を質の高いものとして選び再録している。一つは、*Exceptional Photoplay* の1・2月号に掲載されたもので、著者の名前、ページは不明である。要約すると、チャップリンのやり方はいわゆる「ドタバタ喜劇」であるが、この言い方が、チャップリンの評判を悪くしている。映画の中のエンドレスな叩き合いや滑ったり転んだり、よたよた歩きは上流社会では受け入れがたく、表向きには認められない。ドタバタ喜劇は映画の世界で発明されたと思っているのだろうけれども、喜劇映画よりずっと前にアリストファネスもセルバンテス、シェイクスピア、ゲーテもドタバタ喜劇に満ちている。ドタバタによってもたらされる効果が本物なら、その芸術的な方法を批判するのはばかげている。『キッド』には無限のユーモアとつかの間のペース、そしてかすかな風刺がある、と主張している（Kauffmann 115-17）。要するに、「ドタバタ喜劇」という形式そのものを古典文学の作家たちの名によって権威付けられた芸術様式の枠組みでとらえれば、チャップリンの映画も「芸術」として認められるというのである。

もう一つは、*New Republic* 3月号に掲載された小説家・批評家フランシス・ハケットによる批評である。「チャップリンは理解している。よたよた歩きで杖を振り回す喜劇役者が赤ん坊を手にしたとき、道化喜劇から、情感のわく芝居へと方向転換しなければいけないことを。しかし同時に感傷的な表現を有効にするための十分な喜劇も維持しなければならないことも。これはチャップリンの独創性が求めるチャンスである。——中略——彼の知恵、誠実さ、芸術的な手本、すべてがこの映画に表現されている。『キッド』は映画製作を一つの産業から芸術へと持ち上げた」と書かれている（Hackett 136-37, Kauffmann 118-21, McCaffrey 104-07, Schickel 153-56）。

さらに1921年は、映画監督、批評家レイ・デリュックが『チャーリー・チャップリン』⁸を書き、『犬の生活』に対し、「この映画、この物語、この哀れみ（ピエタ）は、映画史上初の完璧な芸術作品だ」（Delluc 92）と評したことは、様々な批評家が指摘している。デリュックはフランス人の視点から、創作者という意味でモリエールやニジンスキーとチャップリンを重ね合わせ、登場人物の型とい

⁷ “A Picture with a smile—and perhaps, a tear”（微笑みと——そしておそらく一粒の涙をともなう映画）という字幕が配役タイトルの次に入る。DVD『キッド チャールズ・チャップリン メモリアル・エディション』、角川書店、2003年を参照。日本語訳は筆者による。

⁸ 一人の映画作家を扱った著作本としては初めてのものの。

う観点から、17世紀のイタリアンコメディや19世紀の英国のパントマイムの登場人物と放浪者チャーリーを重ね合わせている(15, 28)。

3. 考察

アメリカ国内では、チャップリン映画の急速な人気の陰で映画の「低俗性」が問題となり、「文化的な分断」が生じた。それはすなわち、チャップリンを「喜劇役者」として評価するか「芸術家」として評価するかという映画批評の言説における線引きとして現れた。一方、西欧において文学や演劇批評の言説では、チャップリンの放浪者は伝統的な「道化」の末裔として認識されるようになる。デイビッド・マッデンは論文「ハーレクイン⁹の棒、チャップリンの杖」において、「1920年代にコメディア・デラルテ¹⁰に関する最良の書物のほとんどが出版された」が、その多くは、「コメディア・デラルテの道化とチャップリンの放浪者とを並べて、類似点を挙げるだけで、比較にいたっていない」と指摘する(Madden 10)。彼は主にデュシャルトルの『イタリアンコメディ』¹¹を援用してコメディア・デラルテに関する説明を行っている。『イタリアンコメディ』には「プルチネッラの演技とチャーリー・チャップリンの演技」という小見出しがあり、「本人が気づいているかはわからないが、疑いなくチャーリー・チャップリンはめったにいないコメディア・デラルテの伝統の継承者のひとりである。チャップリン氏はおそらく『プルチネッラ、盗賊頭』と呼ばれるシナリオになじみはないと思うが、その中に出てくるプルチネッラの所作、ある滑稽で独創的な効果が映画『担へ銃』に丸ごと引き継がれたように思う」として、二人の類似を挙げている(Duchartre 219)¹²。

デュシャルトルの他に、1920年から30年代にかけてチャップリンと道化を関連付けている批評言説に、演劇史家コンスタン・ミックの『コメディア・デラルテ』(1927)、画家、文筆家ウィンダム・ルイスの『ライオンとキツネ』(1927)、演劇史学者イーニッド・ウェルズフォードの『道化』(1935)などがある。西欧諸国で消滅したとされる道化を語るうえで、目に見える道化の身近な例として当時のスクリーンで大流行していた放浪者チャーリーが引き合いに出されたのだ。この事実は

⁹ ハーレクイン(アルレッキーノの英語名、アルルカンとも呼ばれる)はイタリアの即興喜劇や英国の無言劇などの喜劇の道化役。

¹⁰ コンスタン・ミック、梁木靖弘訳『コメディア・デラルテ』(1987)によれば、16世紀にイタリアで発生し18世紀に消滅したイタリア喜劇で、直訳すると「プロの芝居」。他に「即興芝居」、「道化喜劇」とも呼ばれる。特徴は、作者がいない舞台の台本を役者たちが共同で練り上げ、すべての役柄はいくつかの基本的な類型に属し、芝居によって変化する(ミック49)。

¹¹ この『イタリアンコメディ』は1966年版の英語訳である。原文はフランス語で1925年から出版されており、2012年まで三か国語53版が存在する名著である。

¹² ロバート・レンキューイクズによれば、『プルチネッラ、盗賊頭』(*Pulcinella the Brigand Chief*)には、捕まったプルチネッラが絞首台に連れていかれるが、愚者を装って執行人にロープの掛け方を実演させ、その執行人をプルチネッラが絞首してしまうという場面がある(Lenkiewicz)。これが、チャップリンの『担へ銃』の中、敵地へ乗り込んだチャーリーが木に化けて、近づいて来た敵を殴って倒すという場面に引き継がれていると解釈できる。プルチネッラはコメディア・デラルテに登場する人物の役柄のひとつである。17世紀に英国に伝わり、人形劇『パンチ&ジュディ』のパンチへと変化する。

チャップリンが、大衆娯楽の人気者から芸術の対象へ飛躍したことを意味するだろう。

「笑いと涙」や「ユーモアとペース」という言葉がチャップリンに添えられるようになったのは、チャップリン自身が「喜劇ドラマ」と呼んだ『キッド』について書かれた批評言説によるものだ。この「ユーモアとペース」を合わせる手法は、すでにコメディア・デラルテにおいて、さらにミュージックホールの演芸にも受け継がれている手法である。マッデンによると、コメディア・デラルテとサイレントの喜劇映画に共通する演目には、「翻案もの、パロディ、風刺、牧歌劇、メロドラマ、そして悲喜劇」というジャンルがある（Madden 24）。この最後の「悲喜劇」に当たるのが『キッド』である。ピーター・ダビソンは『英国の現代演劇と大衆劇の伝統』の中で、ミュージックホールの芸人は、観客の即座の反応をコントロールする能力が必要で、笑いからペース、ペースから笑いへと観客のムードをころころと変えることができたと説明している（Davison 19）。

1920年代のコメディア・デラルテに関する出版ラッシュには、イタリア劇作家、小説家のルイージ・ピランデッロが、『キッド』と同じ1921年に、戯曲『作者を探す六人の登場人物』を発表し、まずヨーロッパで話題となり、世界中へ広まったことが影響していると考えられる。ピランデッロは1934年にノーベル文学賞を受賞している。

ミックの本の献呈の辞はチャップリンに捧げられ、「本書をチャールズ・スペンサー・チャップリン氏に捧げることによって、著者は、ただたんに現代の最も偉大な喜劇俳優にうやうやしく献呈しようということを示すだけではなく、かつてのイタリア喜劇が今日に占めるべき位置もまたさし示したい」と述べられている（ミック 10）。かつてイタリア喜劇に登場した道化とチャップリンが演じる放浪者チャーリーは、時代とジャンルの壁を越えて、1920年代において同じスポットライトを浴びたのだ。ハフは1951年にチャップリンの伝記と映画（特に情報が散逸していたキーストン社時代）の解説をまとめ、チャップリン研究の金字塔の一つとなる『チャーリー・チャップリン』を出版する。彼はチャップリンを「コメディア・デラルテ直系の子孫である道化、20世紀のアルルカン、グリマルディ¹³」（Huff 1）と呼び、「道化の末裔」のイメージを映画批評にも定着させた。

引用文献

ミック、コンスタン『コメディア・デラルテ』、梁木靖弘訳、未来社、1987年。

Chaplin, Charles. *My Autobiography*, Penguin, 1964.

———. “What People Laugh At,” *American Magazine*, Nov. 1918, pp.34, 134-37.

Davison, Peter. *Contemporary Drama and The Popular Dramatic Tradition in England*, Macmillan, 1982.

Delluc, Louis. *Charlie Chaplin*, trans. Hamish Miles, Bodley Head, 1922.

Duchartre, Pierre, Louis. *The Italian Comedy*, Dover Publications, 1966.

Eubank, Victor. “The Funniest Man on the Screen,” *Motion Picture Magazine*, Mar. 1915, pp.75-77.

¹³ Joseph Grimaldi (1779-1837) は、英国で「道化役の王様」と称されたパントマイムの役者。

- Farmer, Harcourt. "Is the Charlie Chaplin's Vogue Passing?" *Theater Magazine*, Oct. 1919, p.249.
- Fiske, Minnie Maddern. "The Art of Charles Chaplin," *Harper's Weekly*, May 1916, p.494.
- Frohman, Ray W. "Charlie Chaplin," *Los Angeles Herald*, Dec. 1919.
- "Gallery of Picture Players," *Motion Picture Magazine*, Dec. 1914, p.24.
- "Greenroom Jottings," *Motion Picture Magazine*, Aug. 1914, pp.126, 131.
- Hackett, Francis "The Kid," *The New Republic*, Mar. 30, 1921, pp.136-37.
- Hampton, Benjamin B. *History of the Movie*, Athena Press, 1931.
- Hayes, Kevin J, ed. *Charlie Chaplin Interviews*, U.P. of Mississippi, 2005.
- Hirsch, J. B. "The New Charlie Chaplin," *Motion Picture Magazine*, Jan. 1916, pp.115-17.
- Huff, Theodore. *Charlie Chaplin*, Schuman, 1951.
- Kauffmann, Stanley ed. *American Film Criticism*, Liveright, 1972.
- Lenkiewicz, Robert. "History of the Harlequinade," 5 May 2015,
<https://www.robertlenkiewicz.org/content/history-harlequinade>.
- Lewis, Percy Wyndham. *The Lion and the Fox*, Grant Richards, 1927.
- Madden, David. "Harlequin's Stick, Charlie's Cane," *Film Quarterly*, Vol.22, No.1, Autumn, 1968, pp.10-26.
- Maland, Charles J. *Chaplin and American Culture : The Evolution of a Star Image*, Princeton U.P., 1989.
- McCaffrey, Donald W, ed. *Focus on Chaplin*, Spectrum, 1971.
- Mic, Constant. *La Commedia Dell'Arte*, J. Schiffrin, 1927.
- O'Higgins, Hervey. "Charlie Chaplin's Art," *New Republic*, Feb. 1917, pp.16-18.
- "Penographs of Leading Players," *Motion Picture Magazine*, Aug. 1914, p.131.
- Pirandello, Luigi. *Six Characters in Search of an Author and Other Plays*, trans. intro. Mark Musa, Penguin, 1995, pp 1-66.
- Robinson, David. *Chaplin : His Life and Art*, Grafton, 1985.
- Schickel, Richard, ed. Intro. *The Essential Chaplin*, Ivan R. Dee Chicago, 2006.
- "The Great Artist Contest," *Motion Picture Magazine*, Oct. 1914, p.128.
- "The Great Cast Contest," *Motion Picture Magazine*, Jan. 1915, p.126.
- "The Kid," *Exceptional Photoplays*, Jan.-Feb. 1921.
- Wagner, Rob. "Mr. Charles Spencer Chaplin : The Man You Don't Know," *Ladies Home Journal*, Aug. 1918, p.82.
- Welsford, Enid. *The Fool : His Social and Literary History*, Faber and Faber, 1935.

DVD

『The Kid キッド チャールズ・チャップリン メモリアル・エディション』、角川書店、2003年。

【Abstract】

Charles Spencer Chaplin Portrayed through Critical Discourses around the Time of *The Kid* (1921)

Yuka IGARASHI*

This research note explores the nature of, and background to, the changes in critical discourses on Chaplin in film magazines and newspaper articles from 1914 to 1921.

In the shadow of the soaring popularity of Chaplin's films since his debut, the supposed "vulgarity" of his slapstick comedy was the subject of criticism among some of the genteel in the United States. To appeal to both his existing fans and polite society, his middle course was to create a film that combined elements of both "vulgarity" and "artistry". Thus in 1921, when *The Kid*, which Chaplin called "a slapstick with sentiment", was released, Chaplin was highly praised and began to be described as an "artist" in film reviews and critiques. Furthermore, in books on the "clown" in Italian comedy and Elizabethan drama, which developed into a publishing boom from the 1920s to the 1930s, Chaplin was referred to as a twentieth-century counterpart to Harlequin.

Key words : Charles Chaplin, *The Kid*, clowns, slapstick comedy, *commedia dell'arte*

本稿は、1914年から21年までの映画雑誌、新聞記事に掲載された批評言説において、チャップリンが「喜劇役者」から「芸術家」へと変化する過程、背景をまとめた研究ノートである。

1914年のデビュー以来、米国でチャップリン映画が急速に大衆の人気を集める裏で、映画の批評言説においては、ドタバタ喜劇の「低俗性 (vulgarity)」ゆえに上流階級からの非難もあがっていた。製作した映画が万人から容認されるために、チャップリンがとった中道策は、「低俗性」と上流階級が求める「芸術性」を併せ持つ作品を製作することであった。こうして1921年、喜劇にペーソスを交えた『キッド』が公開され、娯楽産業でしかなかった映画において、チャップリンは「芸術家」として称賛された。さらに、1920年代から30年代にかけて出版ブームとなった、演劇、文学の「道化」にまつわる批評言説では、西欧諸国で消滅したとされる道化の末裔としてチャップリンが認識されるようになった。

キーワード：チャールズ・チャップリン、『キッド』、道化、ドタバタ喜劇、コメディア・デラルテ

* A visiting research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University